

令和7年度 文部科学省委託事業 いじめ対策・不登校支援推進事業
いじめ・不登校等の未然防止等に向けた魅力ある学校づくりに関する調査研究

「心理分野に強みや専門性を有する教師の 育成のための教職員向け研修プログラム」

第11章 個人と環境のアセスメント

筑波大学・教授

飯田 順子

奈良教育大学・教授

粕谷 貴志

※所属は2026年3月時点のものです

児童生徒のかかわりを通じた発達支持的な指導援助のために

生徒指導において発達を支えるとは、児童生徒の心理面（自信・自己肯定感等）の発達のみならず、学習面（興味・関心・学習意欲等）、社会面（人間関係・集団適応等）、進路面（進路意識・将来展望等）、健康面（生活習慣・メンタルヘルス等）の発達を含む包括的なものです。

生徒指導の実践上の視点

1. 自己存在感の感受
2. 共感的な人間関係の育成
3. 自己決定の場の提供
4. 安全・安心な風土の醸成

「生徒指導提要」（2022年改訂）

環境としての学級・学校の集団が、児童生徒同士のかかわりを通じた成長・発達を促す状態にあることが、発達支持的生徒指導が機能するための基盤となる。

生徒指導上の諸課題の未然防止のために

<心理面>

価値がない自分
他者不信
不安が強く自信がない
自己評価が低い

学習意欲が低い
人間関係がつかれない、孤立
登校しぶり、不登校
いじめ被害、加害、攻撃性
自傷行為、「消えたい」「死にたい」
SNS、ネット、ゲーム依存

<社会面>

ルールやマナーを学習していない
同年代との率直な関係を築けない
引っ込み思案、傷つきやすい
感情のコントロールが難しい

<身体・健康面>

警戒や緊張が強い
注意集中、我慢することが難しい
スイッチが入ったように暴力的になる
固まる。ボーッととしてうつろな状態になる

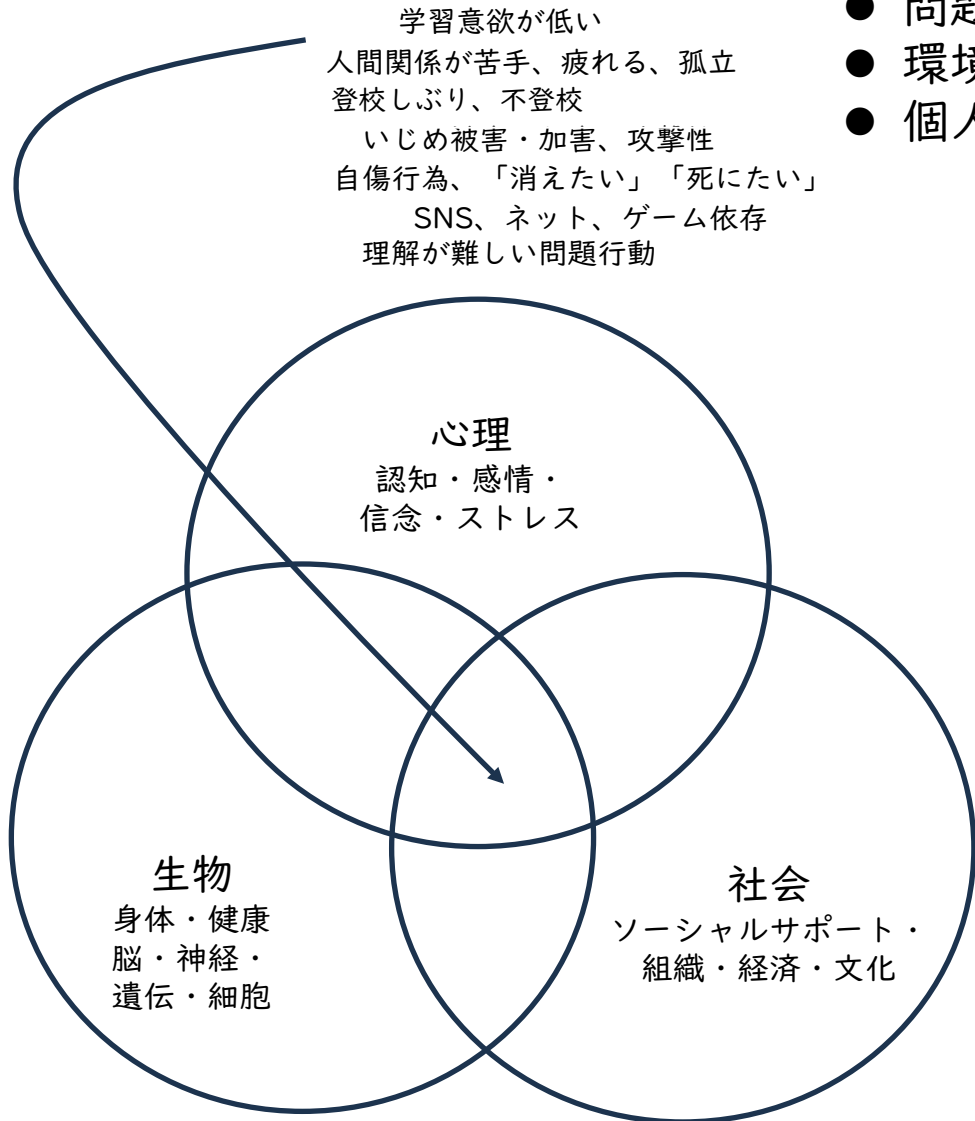
理解



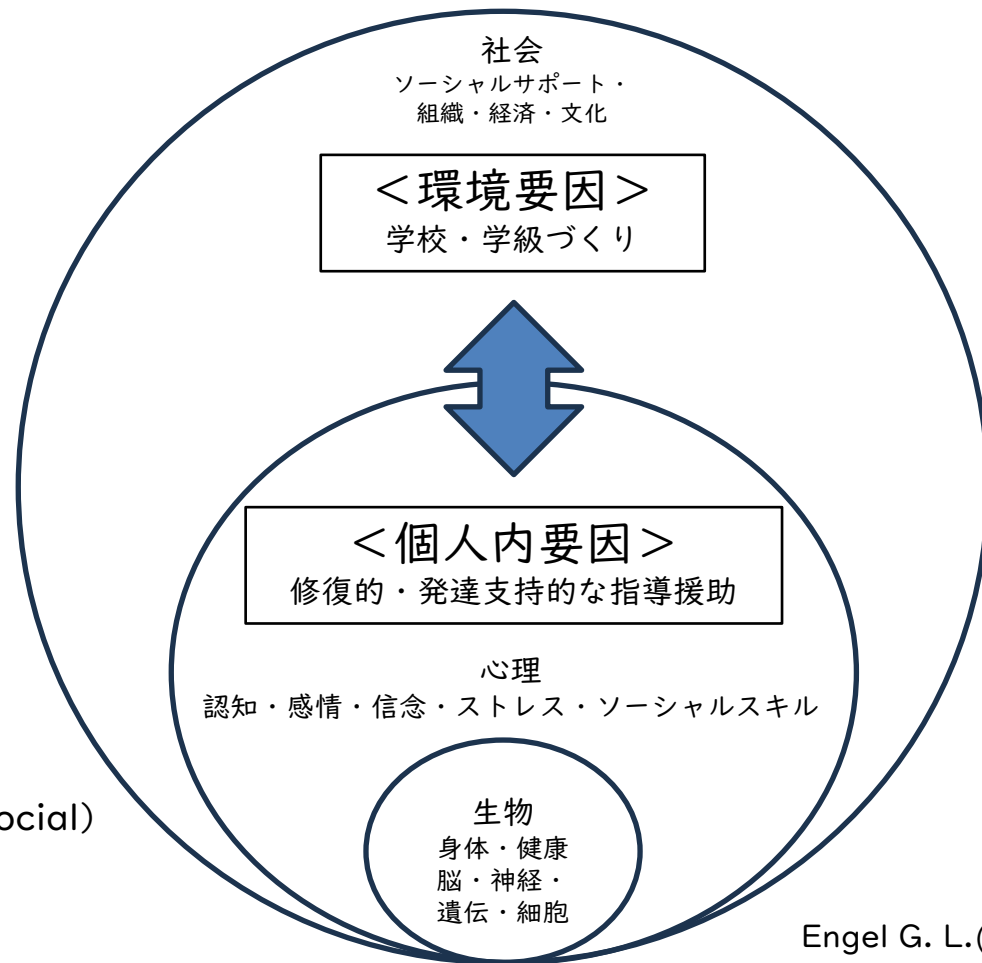
指導援助・コミュニケーション

課題を抱える児童生徒への修復的な発達援助のために

- 問題は環境要因と個人内要因が複合して起きる
- 環境の中で社会面・心理面、身体・健康面の発達の課題が顕在化する
- 個人の発達の課題が大きいほど環境要因の影響を受けやすい



BPSモデル
(Bio-Psycho-Social)

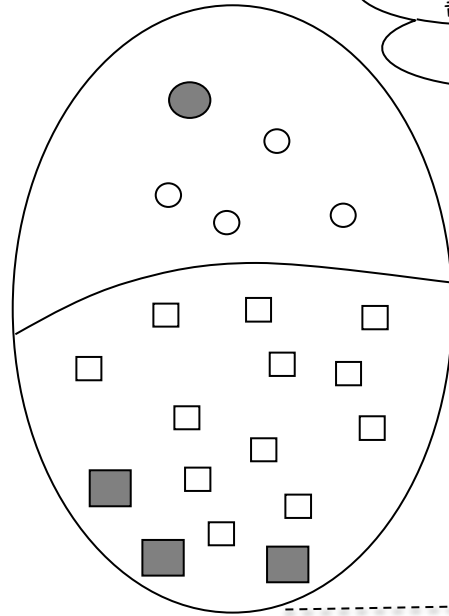
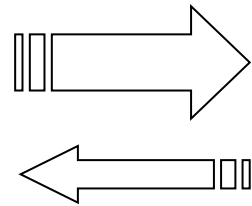
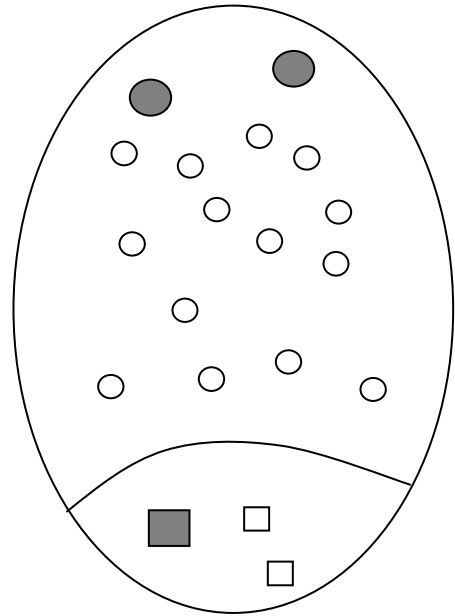


Engel G. L.(1980)

児童生徒同士のかかわりを通じた修復的な発達援助の視点が求められる

環境としての学級・学校の集団育成のために

《学級集団のモデル図》



心理面、社会面、身体・健康面の発達レベルが良好でない児童生徒の割合が多いと学級集団を良好に育てることが難しくなる。

心理面：
自分に自信がない、低い自己肯定感

社会面：
人間関係で悩む、人間関係の形成が難しい

身体・健康面（脳・神経系）：
キレる、情動や行動のコントロールが難しい

心理面、社会面、身体・健康面の発達レベル
●：特に良好 ○：良好 □：良好でない ■：特に良好でない

粕谷貴志（2025）学校・学級の荒れ『学校心理学事典』日本学校心理学会編 丸善出版

学級の児童生徒の「個」のアセスメントとともに、「集団」の状態と課題についてのアセスメントをすることが求められる。

アンケートツールのデータを活用するために

【特徴】

- 一斉に実施でき、多様な視点からアセスメントのための資料を得ることができる
- 観察法、面接法では得られにくい情報を得ることができる
- 教職員が児童生徒の課題を共通理解するための資料となる



【活用する際の留意点】

- 回答した個々の児童生徒の日常の姿（観察法、面接法）の情報と統合する
- 下位尺度結果だけでなく、尺度を構成する質問項目の反応にも注目する
- 認知の偏りの影響はないか、質問項目に正直に回答しているかなど、アンケートへの回答であることの限界を踏まえる
- 個のアセスメントと集団の状態と課題のアセスメントの両方の視点をもつ

アンケートツールの特徴（メリット・デメリット）と限界を踏まえ、できるだけ多くの教職員の参加でアセスメントをおこなうことによって共通理解を形成し、連携、協働による支援や実践につなげる

数値データの特徴を理解した活用

	氏名	1	2	3	4	5	6	合計
		がある いやなことをされること クラスの人からネットで	ある からからかわれることが 失敗したときクラスの人	とがある ない悪ふざけをされるこ とがある	う 学校に行きたくないと思 うことがある	て グループに入れずに残っ てしまうことがある	いてくれる ひやかさずにしっかり聞 いてくれる	クラスの人には発表する時 ひやかさずにしっかり聞 いてくれる
1		1	2	1	1	2	1	8
2		1	2	4	1	1	1	10
3		1	1	1	2	2	1	8
4		1	1	1	4	1	1	9
5		4	4	4	3	4	3	22
6		1	2	2	2	2	2	11

4: とてもあてはまる 3: ややあてはまる 2: あまりあてはまらない 1: まったくあてはまらない

アセスメントツールの選択と活用

<日常の観察・聴き取り>

個別の理解

友人関係、学習適応、教師との関係、
欠席行動、いじめ被害の有無・・・



集団の把握

課題をかかえる児童生徒の割合
規律（ルール）
関係性（リレーション）
リーダーとフォロアーの状況・・・



<アンケートツール>

Q-U、ASSESS、i-check、シグマ検査、
子どものための「学級風土調査」
教育委員会等のアンケート・・・

- 学級の雰囲気
- 学級の親しさ
- 承認感
- 学級の絆
- 学級の規律、不和
- 学級の規範意識
- 非侵害的關係
- 被侵害感
- ソーシャル・スキル
- 友人関係
- 向社会的スキル
- 自尊感情
- 自己肯定感
- 対人ストレス

観察法・面接法・調査法から得られた結果を統合して、総合的に個と集団のアセスメントをおこなう。

学級集団を見る枠組み（フレームワーク）

満足型学級

<意欲的・親和的>
ルール○
リレーション○

集団であること

- ルールやマナー（規律）が共有されていること
- リレーション（かかわり）があること

管理型学級

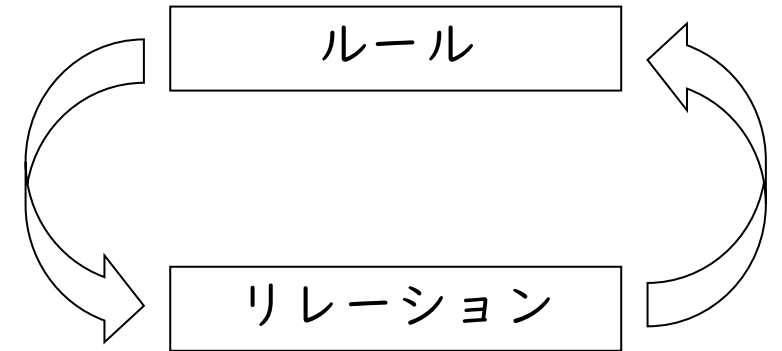
<従順・活気がない>
ルール○
リレーション△

荒れ始め学級

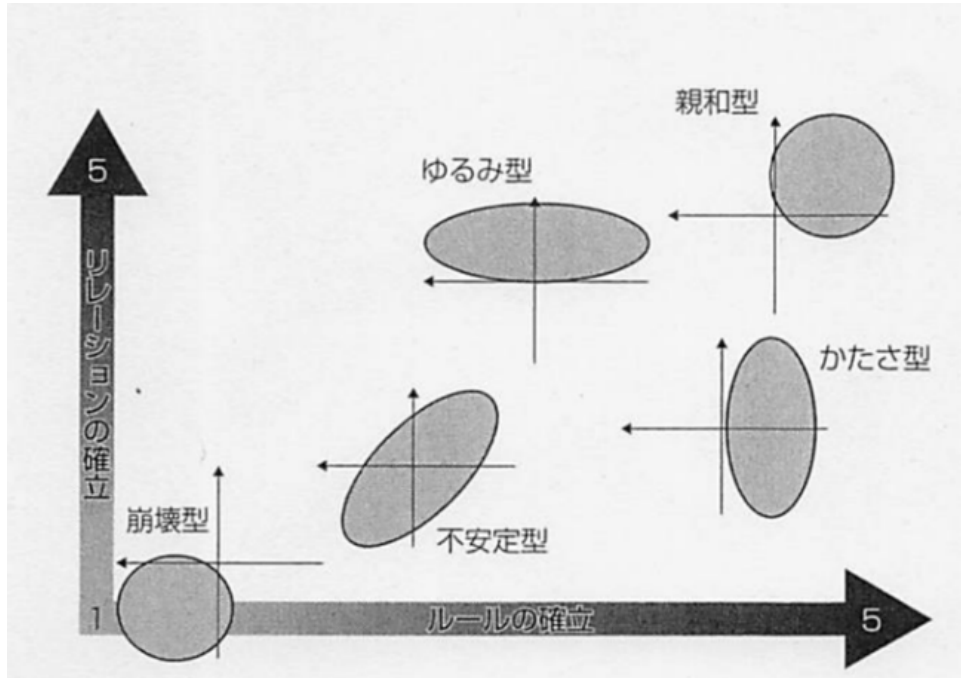
<バラバラ、勝手な言動>
ルール△
リレーション△

<のびのび・けじめがない>
ルール△
リレーション○

なれあい型学級



アンケートツール（Q-U）を活用した集団のアセスメント



河村茂雄（2025） 「子どもたちの行動を決める学級の『空気』」 図書文化

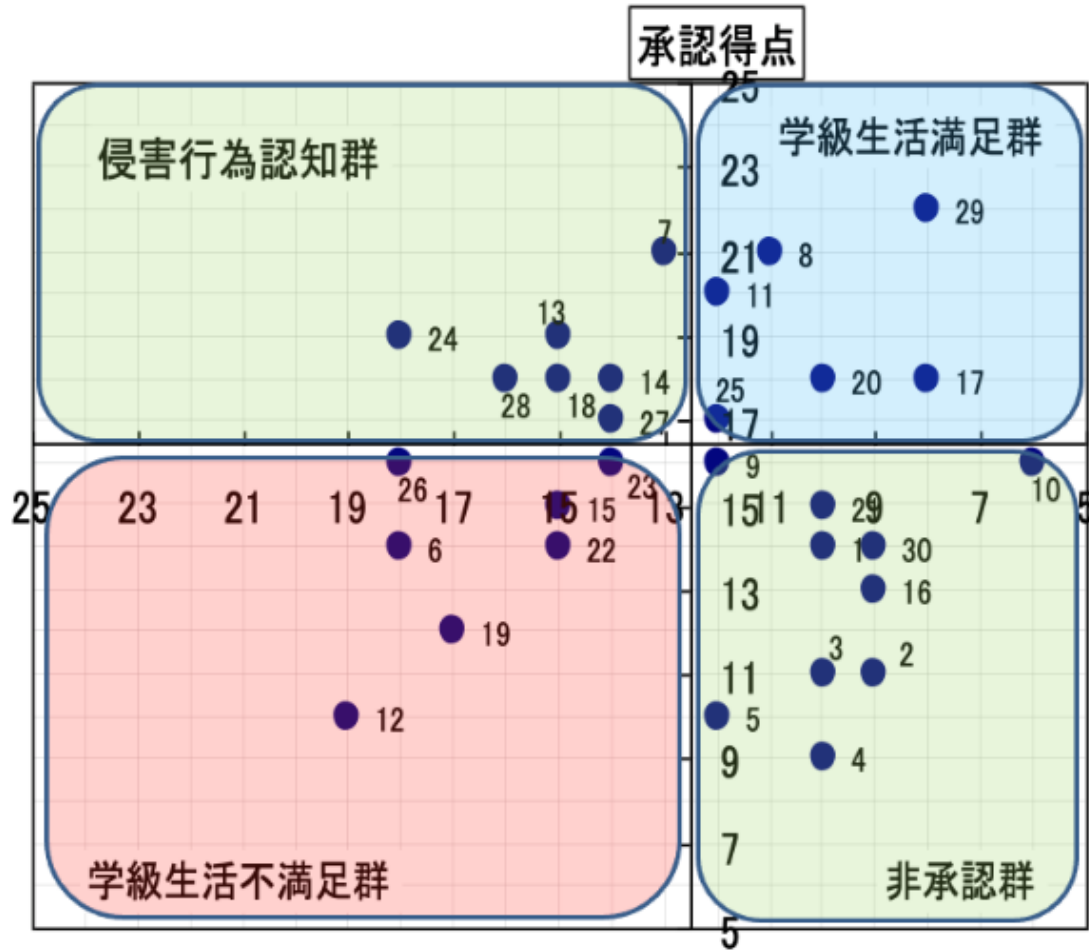
ルール（規律）

リレーション（親和的・支持的な関係性）

5	内在化。教師の指示がなくても注意し合う	5	親和的。全体で本音の交流ができる
4	自分たちで判断し，教師の指示が少なくてもほぼ適切に行動	4	小グループの枠をこえて，多くが誰とでも交流できる
3	教師が指示すれば学級全体ですぐに行動できる	3	それぞれ仲がよいが関係はグループ内に閉じている
2	おおむね教師の指示に従うが時間がかかる時がある	2	不安で形成された小グループが乱立し，孤立がある
1	反発があり教師の指示が通りにくい	1	防衛的で，グループ間対立あり，孤立・裏面交流がある

河村茂雄 「Q-U事例検討会・学級づくりアセスメント・対応策シート」を参考に改編

アンケートツール (Q-U) を活用したアセスメント



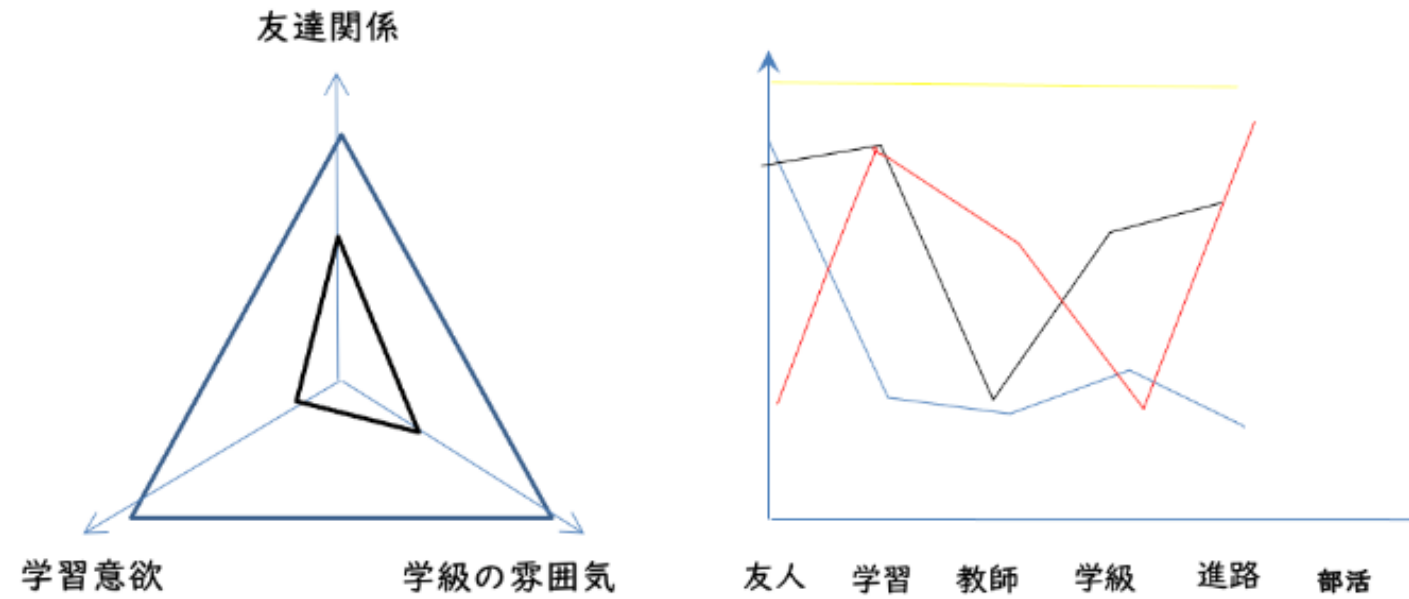
【やる気のあるクラスをつくるためのアンケート
ト

- 「友達関係 (友人との関係)」
- 「学習意欲」
- 「学級の雰囲気 (学級との関係)」
- 「(教師との関係)」
- 「(進路意識)」
- 「(部活との関係)」

※ () は中学校用、高等学校用のみ

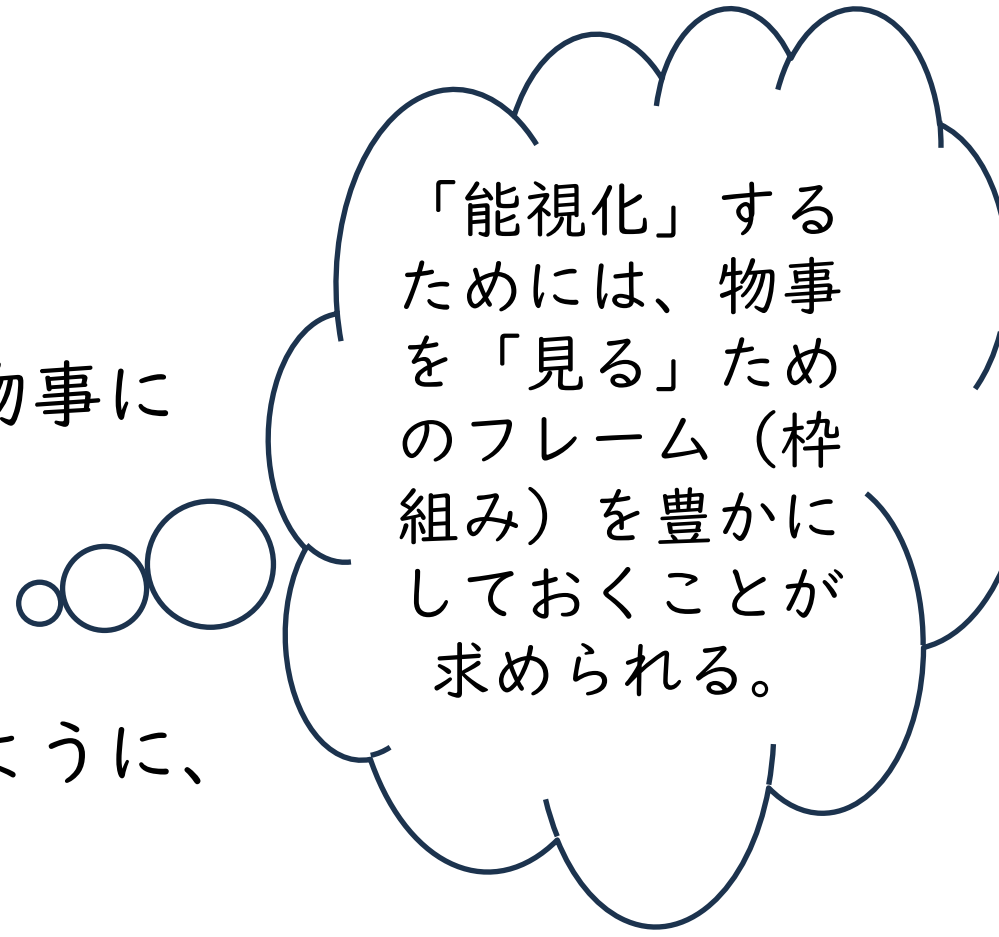
【いごちのよいクラスにするためのアンケート】
「承認」「被侵害」

被侵害得点



「見る」ということ

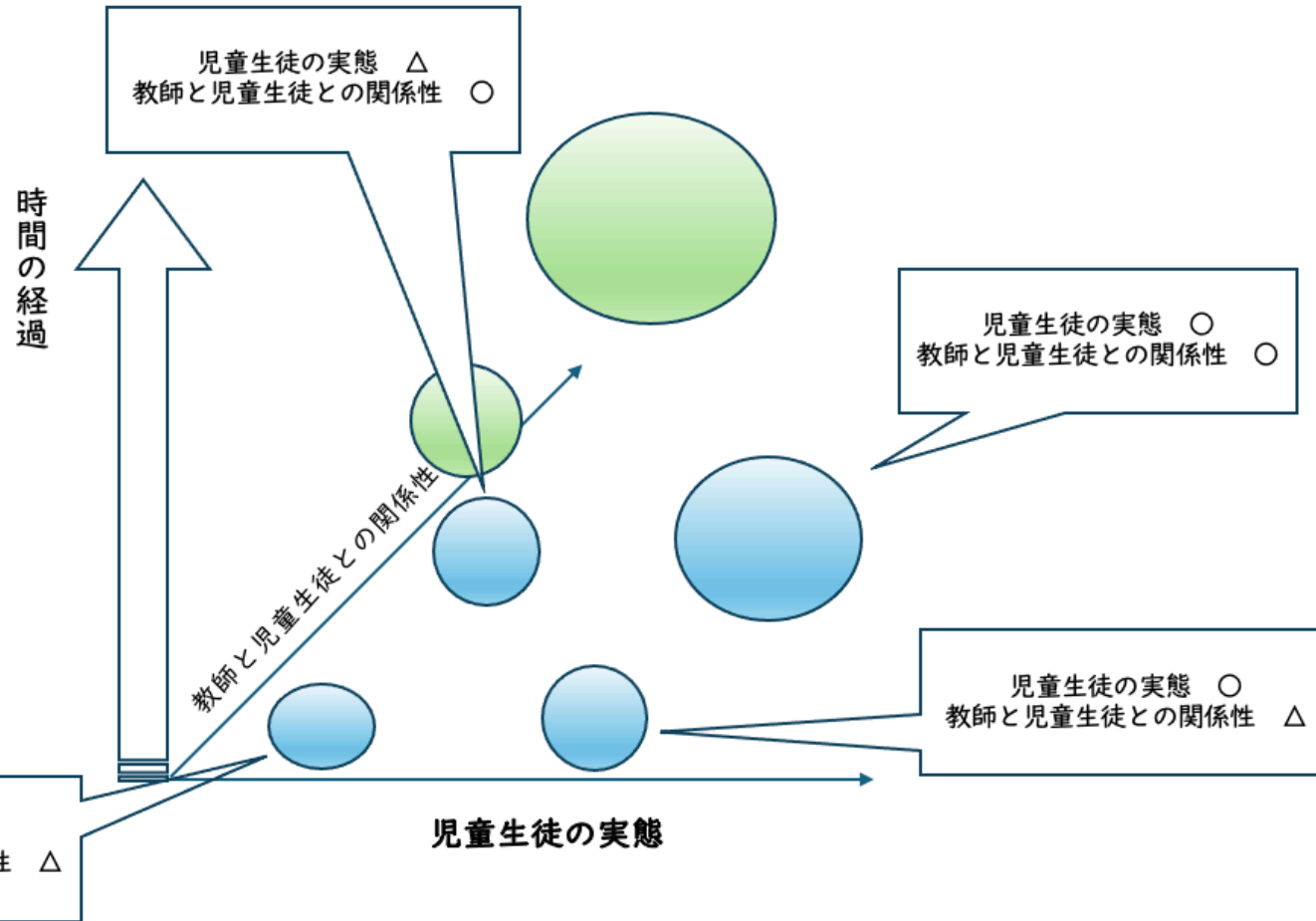
- 「可視化」
見えなかった物事それ自体を、見える物事にすること
- 「能視化」
見えなかった物事が見えるようになるように、私自身が変わること



「能視化」するためには、物事を「見る」ためのフレーム（枠組み）を豊かにしておくことが求められる。

「能視化」では、見える前と見える後とで変化したのは、現象の方ではなくて、それを見る「私」

アセスメントツールの活用と心理教育的援助サービス



- 児童生徒と集団状態を理解する資料を得る
- 児童生徒の援助ニーズの共通理解
- アセスメントの視点を共有する
- 対応策のアイデアを共有する
- 教師の支援量の共通理解
- 方針の共有と協働の形成

「児童生徒の実態」と「教師と児童生徒との関係性」を考慮すると選択できる指導援助は限られる。それに、時間の経過による見通しをもって最適な指導援助を決定していく。

【演習2】 アセスメントの演習（後半：環境のアセスメント）

〔目的〕

- 学校内で集めたアセスメントの情報の裏付けとして、アンケートツールの結果を活用する。
- アンケートツールの結果と日常の関わりや観察で得られた情報を統合して実態を把握し、援助方針や具体的な援助案を考える。

〔手順〕

- (1) (演習1)の「事例の概要」と援助資源チェックシート、援助チームシートのA～Cまでに加え、ケイタさんの所属する学級の状態についての情報を確認する。(3分)
- (2) アンケートツールの結果【アンケートツールの集計結果(主な情報)】と(1)で確認した学級の状態についての情報、学級でのケイタさんの状況を統合して理解可能なことを思いつく限り【アンケートツールの結果から理解できる情報】欄に記入する。(10分)
- (3) (2)でメモした情報をもとに、アンケートツールの結果と学級集団の情報及び、ケイタさんのこれまでの情報を統合して、ケイタさんの所属する学級とケイタさんの学級での状況をどのように理解することができるかを援助チームで検討する。(7分)
- (4) (3)で共通理解した学級集団とケイタさんの学級での状況(と演習1でのケイタさんの理解)をもとに、援助案についての意見交流をする。(5分)

手順（１）

手順(1)

（演習１）の「事例の概要」と援助資源チェックシート、援助チームシートのA～Cまでに加え、ケイタさんの所属する学級の状態についての情報を確認する。（3分）

【学級に関する情報】

学習や集団生活に苦戦するケイタさんに傷つく言葉をかけたり、ケイタさんのことをわざと避けたりする生徒がいる。また、ケイタさんが過敏な反応をすることに構わず心ない言動でかかわり、泣き出したり手を出したりするような状況を見て面白がっている生徒が複数いる状態である。また、ケイタとのトラブルには直接は関わらない周りの生徒たちは、トラブルをとめたり教師に相談したりせず、しらっとした態度でかかわり合うことを避ける様子である。ただし、学級の中には、ケイタのことを心配したりトラブルが起きる学級の雰囲気を感じている生徒もいる

入学してくる2つの小学校のうち、片方の小学校で6年生のときに学年全体が荒れて落ち着かなくなっており、その中心メンバーがこの学級にいる。もう一方の小学校から来た生徒も教師の指導に対して不満そうにしたり従わなかったりする生徒が複数いる。

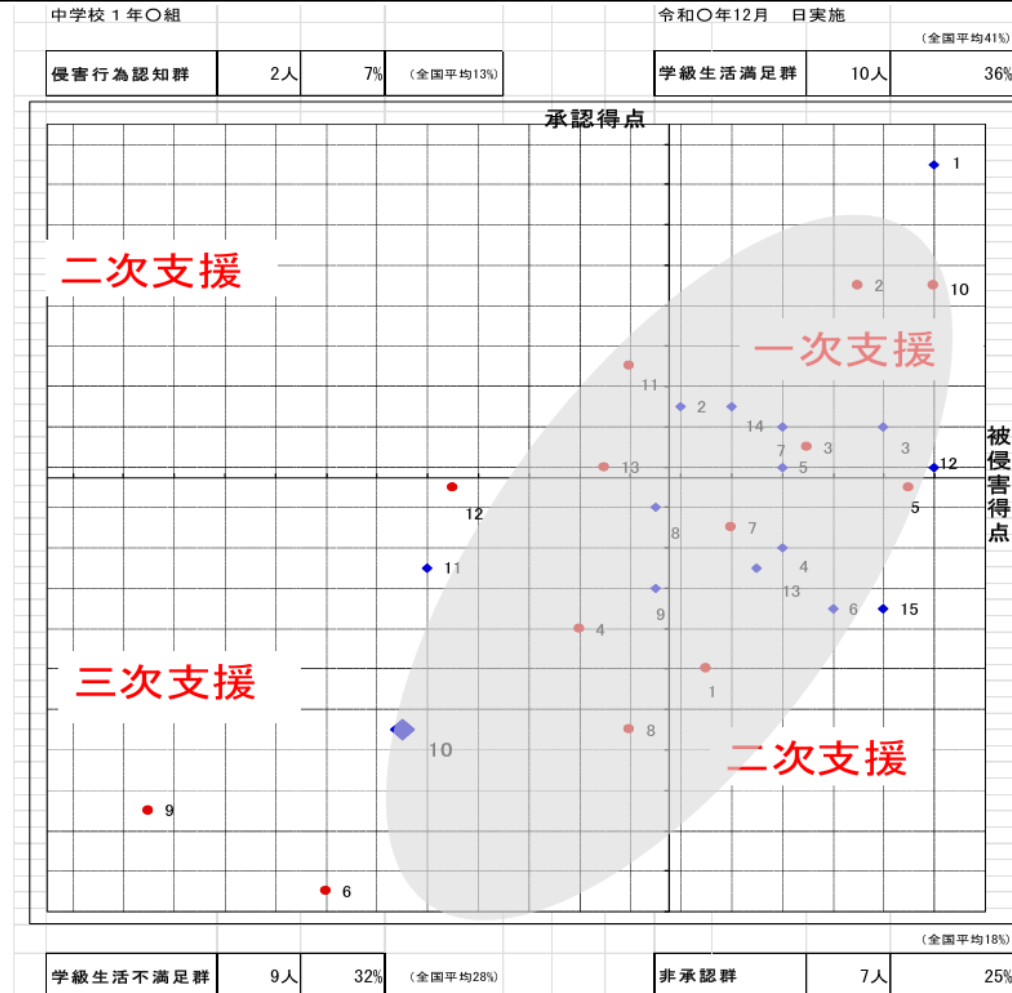
全体として中学生としては幼い感じで感情のコントロールが難しかったり、集団生活で必要なルールやマナーを学んでいなかったりするため、人とのかかわり方について一つ一つ理由を説明しながら教えていかなければならない。

学級のリーダーは真面目に学級をまとめようとするが、それに対して協力的な生徒とそうでない生徒に分かれてしまっている。

手順 (2) ①

手順(2)

アンケートツールの結果【アンケートツールの集計結果（主な情報）】と手順(1)で確認した学級の状態についての情報、学級でのケイタさんの状況を統合して理解可能なことを思いつく限り【アンケートツールの結果から理解できる情報】欄に記入する。（10分）



手順（２）②

①学級集団の状態の理解に関する結果

- ・承認と被侵害の2つの得点による座標プロット（テキストp.30）では、全国平均に比べて非承認群と学級生活不満足群に位置する生徒の割合が高く、分布の状態から「不安定型」と考えられる結果であった。
- ・リーダーの生徒（男子3番・女子10番：☆印）は、学級生活満足群に存在していた。
- ・アンケートの各質問項目への反応に注目すると、「無視されたり冷やかされたりすることがある」といった被侵害感に関する項目にネガティブな反応をして被侵害得点が高い領域（「侵害行為認知群」「学級生活不満足群」）にいる生徒が複数存在する。
- ・また「友人から認められているかどうか」「学級内に居場所があるかどうか」といった承認感に関する得点は生徒によりばらつきがあり、承認得点が高い領域（「学級生活満足群」「侵害行為認知群」）と承認得点が高い領域（「非承認群」「学級生活不満足群」）に生徒が散らばっていた。
- ・「自分が所属する学級の関係性について」や「学級生活に安心感をもっているか」を見る質問項目では、ポジティブな回答の生徒が多い一方で、一部ではネガティブな回答をする生徒も散見された。
- ・「クラス行事・活動への参加意欲」を問う項目では、生徒によって回答へのばらつきが見られた。
- ・「授業内容の理解度」を問う項目では、1/3の生徒がネガティブな回答をしており、「学習意欲・自主性」を問う項目ではネガティブな回答をする生徒が多かった。
- ・「登校への意欲」を聞く項目に、ネガティブな回答をする生徒が複数見られ、その中には、ふざけやからかいなどの被侵害感が高くないにも関わらず、学校生活を回避する感情を持つ生徒が含まれていた。
- ・「親しみやすい教師や、相談できる教師がいるか否か」を問う項目については学級平均が低く、ネガティブな回答をしている生徒が複数いる結果であった。
- ・ケイタさんに傷つくような言葉を投げかけたり、わざと避けるような攻撃をする男子2名（男子1番、11番：▲印）の回答には、極端に良好な回答や「3（どちらともいえない）」に偏っていた。

手順（２）③

②ケイタさんの状況の理解に関する結果

- ・ケイタさん（男子10番：◆印）は、承認得点が低く、被侵害得点が高い「学級生活不満足群」に位置していた。
- ・ケイタさんは「からかわれたり耐えられない悪ふざけがあるかどうか」を見る質問項目にネガティブな回答をしていた。また、「クラス内で浮いたり孤立したりしていると感じているかどうか」を見る質問項目にもネガティブな回答をしていた。さらに、「登校への意欲」を見る項目にもネガティブに反応していた。
- ・ケイタさんは、「遊んだり話をしたりする友人がいるかどうか」を見る質問項目には、ポジティブな回答をしているものの「自分が所属する学級の関係性についての認知」や「学級生活に安心感をもっているか」を見る質問項目には、ポジティブな回答をしていない。
- ・ケイタさんは、「友人関係をつくっていくことに関する認知」を見る質問項目には、極端にネガティブな回答をしている。
- ・ケイタさんは、「教師との関係についての認知」を見る質問項目にはポジティブな回答をしているものの、「教師と話をしたり相談したりする関係があるかどうか」を見る質問項目には、ポジティブな反応をしていない。
- ・ケイタさんは、「授業での学習内容の理解についての認知を見る質問項目」に極端にネガティブな回答をしているほか、「自分の進路についての認知を見る質問項目にもネガティブな反応である。

手順3①

手順3

手順(2)でメモした情報をもとに、アンケートツールの結果と学級集団の情報及び、ケイタさんのこれまでの情報を統合して、ケイタさんの所属する学級とケイタさんの学級での状況をどのように理解することができるかを援助チームで検討する。(7分)

参考：アセスメントの手引①

【学級集団の理解】

- ① 承認と被侵害の2つの得点による座標プロットでは、被侵害得点が高い生徒が複数存在している結果は、実際にからかいや悪ふざけが発生している可能性を示す。
- ② 承認得点が高い生徒がいる一方で低い生徒が複数存在する結果からは、学級内に居場所があり認められていると感じている生徒と、そうでない生徒に分かれていてお互いに認め合うようなかわりは学級全体に広がっていない可能性が推測できる。
- ③ リーダーの生徒が学級生活満足群にカテゴリ化されている結果からは、リーダーとしてふざけやからかいを受けることや孤立することはなく（被侵害得点が低いため）、メンバーから認められている（承認得点が高いため）と推測でき、リーダーを中心にまとまっていくことができる集団の状態である可能性があると考えられる。
- ④ 「自分が所属する学級の関係性について」や「学級生活に安心感をもっているか」「クラス行事・活動への参加への意欲」など、学級についての認知を問う質問項目への回答が生徒によってばらついている結果からは、誰もが安心して楽しく生活できる集団ではない可能性が推測できる。
- ⑤ 「登校への意欲」を聞く項目に、ネガティブな回答をする生徒が複数見られる結果からは、それらの生徒の承認や被侵害、友人関係、学級集団についての認知を問う質問項目への回答と合わせてみると、集団の状態が良好でないために登校への意欲が低下している生徒が出てきている可能性を考える必要がある。
- ⑥ 承認、被侵害、友人、学級等に関する回答がネガティブではないのに、登校への意欲が低下している生徒がいる結果からは、学校生活以外の家庭環境や生育環境に起因する課題を抱えている生徒が複数存在する可能性が推測できる。

手順 3 ②

参考：アセスメントの手引②

【学級でのケイタさんの状況】

- ① 「からかわれたり耐えられない悪ふざけがあるかどうか」と「クラス内で浮いたり孤立したりしていると感じているかどうか」を見る質問項目にすべてネガティブな回答をしている結果は、そのような侵害行為があると認知していることを示しており、いじめの可能性があると推測できる。
- ② 「登校への意欲」を見る質問項目にネガティブな回答からは、不登校につながるリスクがあることを考える必要がある。
- ③ 「遊んだり話をしたりする友人がいるかどうか」を見る質問項目にポジティブな回答をし、「自分が所属する学級の関係性についての認知」や「学級生活に安心感をもっているか」を見る質問項目には、ポジティブな回答をしていない結果からは、少人数の決まった友人はいるものの、それ以外のメンバーとは良好な関係を持っていない可能性が推測できる。
- ④ 「友人関係をつくっていくことに関する認知」を見る質問項目に極端にネガティブな回答している結果からは、対人関係を形成していくことに苦手意識をもち、そのような自分自身に不全感を持っている可能性が推測できる。
- ⑤ 「教師との関係」についてはポジティブな回答をしているが、「教師と話をしたり相談したりする関係があるかどうか」を見る質問奥目にはポジティブな反応をしていない結果は、担任などの特定の教師との良好な関係を持ちながらも、いじめ被害や自分の悩みなどを相談するまでには至っていない可能性が推測できる。このような大人との関係性の認知は、その根底に生育環境の中で形成された基本的な「他者不信」がある可能性を推測する資料となる。
- ⑥ 「授業での学習内容の理解についての認知を見る質問項目」に極端にネガティブな回答をしているほか、「自分の進路についての認知を見る質問項目」にもネガティブな反応をしている結果からは、学習や進路についても悩みを抱えている可能性が推測できる。

手順 4

手順 4

手順(3)で共通理解した学級集団とケイタさんの学級での状況（と演習1でのケイタさんの理解）をもとに、援助案についての意見交流をする。（5分）

参考：事例の理解と支援の方針（例）

アンケートツールの集計結果から推測される情報と学級の状況についての観察・面接等による情報を統合すると、学級集団のルールとリレーションの段階は、ルール：レベル2、リレーション：レベル2と考えられる。ケイタさんに傷つくような言葉をかける生徒とそれを見て面白がっている生徒が複数おり、それをとめようとする生徒が出てきづらい状態と考えられる。学級のまわりの生徒とのトラブルがケイタさんの安全感を脅かし過剰な反応につながると同時に、心理面、社会面、身体・健康面の発達に課題をかかえていて攻撃性のあるまわりの生徒が面白がってさらにちょっかいをかける悪循環が起きていると理解できる。

ケイタさんへの支援を行う際には、この悪循環をとめることが必要である。短期的には、①侵害行為の背景にある攻撃性につながる大人不信、自己不信の課題をもつ生徒に対して教師が丁寧にかかわりながら大人不信をやわらげ信頼関係を基盤とした指導ができるようにする。②学級全体に対して、お互いに安全、安心が感じられるようなかかわりのために必要なかかわり方を教示し、機会を捉えて経験を通して学ばせていくことから始めて行くことが求められる。

中長期的にケイタさんへの発達支持的な支援を実現するためには、安全、安心が確保された環境において、良好な生徒同士のかかわりの中で、多様な人とのかかわりを豊かに経験させていくことが必要である。そのためにはアセスメントに基づいて集団の現状と課題に応じたルールとリレーションづくりのための実践を行っていくことが求められる。

引用文献(前半)

- 石隈利紀 (1999) 『学校心理学—教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス』 誠信書房
- 石隈利紀・田村節子 (2018) 新版石隈・田村式援助チームシートによるチーム援助入門—学校心理学・実践編 図書文化
- 石隈利紀・家近早苗 (2021) スクールカウンセリングのこれから 創元社
- 松本真理子・森田美弥子 (2018) 心理アセスメント—心理検査のミニマム・エッセンス ナカニシヤ出版
- 田中教育研究所 (編) (2024a) 田中ビネー知能検査VI[®] 田研出版株式会社
- 田村節子・石隈利紀 (2013) 『石隈・田村式援助チームシートによる実践チーム援助—特別支援教育編』 図書文化
- 辻井正次 (2015) SP感覚プロフィール 日本文化科学社
- 辻井正次・村上 隆 (2014) VinelandTM-II適応行動尺度 日本文化科学社
- 日本文化科学社 (2022b) 日本版WISC—V理論・解釈マニュアル
- 日本KABC-IIアセスメント学会 日本版KABC-IIの取り扱いと検査結果報告について【注意点】

引用文献（後半）

- 粕谷貴志（2025）学校・学級の荒れ『学校心理学事典』日本学校心理学会編 丸善出版
- 河村茂雄（2025）「子どもたちの行動を決める学級の『空気』」誠信書房
- 河村茂雄（2006）「学級づくりのためのQ-U入門—楽しい学校生活を送るためのアンケート』活用ガイド」図書文化
- 文部科学省（2022）生徒指導提要
- 吉田章宏（1999）「ゆりかごに学ぶ—教育の方法」一莖書房